

二〇一五年度

第一回入学試験問題

国語

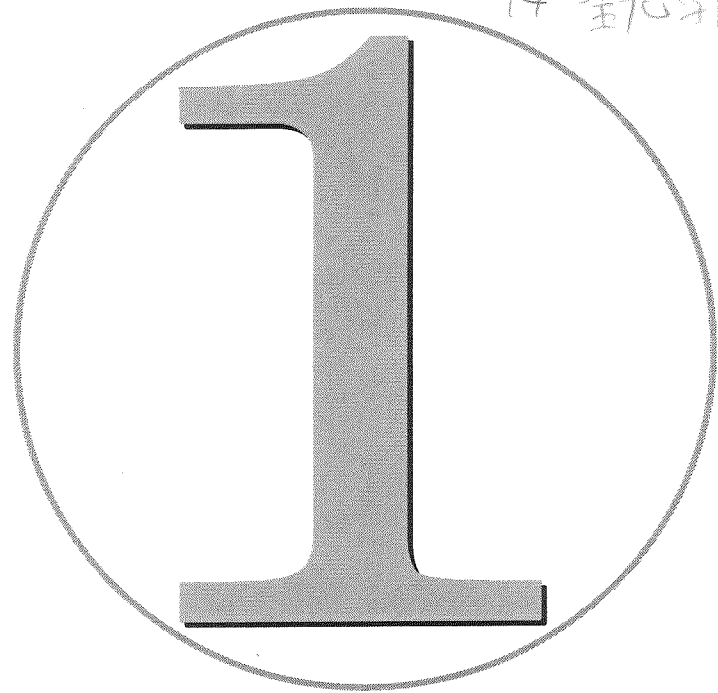
時間 60 分

「注意」

- 1、放送で指示があるまで、この冊子さつしを開いてはいけません。
- 2、この冊子は22ページまであります。ページが足りなかったり、順序がおかしかったり、また印刷が不鮮明ふせんめいで読めない部分があったりした場合には、手をあげて監督かんとくの先生に申し出なさい。
- 3、問題についての質問は一切受け付けません。
- 4、下書きにはこの冊子の下書き欄らんや余白を使いなさい。
- 5、字数指定のある問題では、句読点やカッコなども字数に含みます。

聖光学院中学校

14 聖光学院 第1回



14 聖光学院 第1回

一、次の①～⑤の文の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 家族みんなで初日の出を見に山に登ったとき、弟はソッセンして山道を歩き始めた。
- ② もうすぐ頂上に着くというところで、弟がセイコン尽き果てて座り込んでしまった。
- ③ おばあちゃんがポケットから取り出した塩飴がソウコウし、弟は元気を取り戻した。
- ④ 頂上にたどり着き、明るんでいく雲海を前に、オゴソかな気持ちで日の出を待った。
- ⑤ 家族そろって美しいご来光をオガむことができたのは、忘れられない思い出である。

(1-1)

二、次の①～⑤の□には、□の上の語につながると最初の音が濁音に変わる言葉が入ります。例にならって□に入る言葉を考え、元の言葉をひらがなで答えなさい。

例		
とらえ	出	うち
□ どころ	□ どころ	□ どころ
〈答〉 ところ		

⑤	④	③	②	①
通り 気 言い □ □ □	はだ 舌 手 □ □ □	なぐり すじ 寄せ □ □ □	見 読み 歯 □ □ □	運 きも うで □ □ □

(1-2)

三、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

松本憲太と江崎学は生田羽中学校の分校に通う中学一年生である。小学生の頃から仲がよかった二人だが、中学校に入りしばらくした頃から、学は憲太の遊びの誘いに乗らなくなっていた。ある日、生田羽中学校の本校で行われた「星を見る会」の際にも学は一人で図書館に行つて勉強していた。どうして勉強ばかりしているのかと責める憲太に、学は突き放すような態度で応じる。だが、大きな雷が落ちた直後、憲太は学が泣きそうになっていることに気がつく。

学がべそをかく顔なんて、いつぶりに見ただろう？ 見たとしたらぶん、小学校に上がる前だ。

学と聞いて憲太が頭に浮かべる彼の表情は、最近では暗記カードや教科書などを睨みつけるようにしているものと、真面目で整つていて、いかにも頭脳明晰そうにまっすぐ前を見つめる横顔、それから、こちらを振り向いて心底嬉しげに笑う顔——それらだ。

いやそれよりも、①なぜ、涙ぐんでいるんだろう。

「おい……おまえ」

「……憲太は、両親もおじいさんもおばあさんも、ずっとこの村じゃないか。でも僕は違う。親が勝手に……田舎に変な夢抱いて、こんな村に来て」

村おこしの一環として、十数年前に農地を無償で貸し出すと都会から若夫婦を誘致したのは、憲太の祖父の策だった。

「うちの親がそのまま都会にいてくれたら、僕の今はきつと違つてた。こんな村じゃ、十分な勉強なんてできない。札幌や大きな街の子は、なんの苦勞もなく進学塾や予備校に通っている。ネットの授業配信も、もう少し先だつていうし」

泣きべその理由を推しはかりながら、憲太は学をとりあえず励ましてみた。

②でもおまえ、今でも十分すごいじゃん」

「どこがだよ！」

大声を出した学の頬を伝い、細い顎の先からしずくが落ちる。「成績は下がったんだよ、僕は僕なりにやつたつもりだったのに……僕より上のやつらは、みんな都会の子だった。彼らと同じことをやれたら、絶対負けなかったのに」

学は顎を手の甲で拭いながら、進学塾のテキストを拾い上げた。

「環境が違うんだ、勉強する環境が……こんな田舎にいるって、それだけですこいハンデだ。このま

(1-3)

まなら、きつとこれからもどんどん成績は下がる。成績が下がれば、望む高校に行けないかもしれない、大学にだつて」

そして、苦しげに絞り出すような声で、こう断じた。

「生田羽村が、僕の未来を閉ざすんだ」

ああそうか——憲太はA瞬に落ちた——こいつは悔しいんだ。悔しくて泣いているんだ。自分ではどうにもならないことが自分を邪魔していると信じ込んで。

眼鏡を外して肘をつき、両手で顔を覆つて、学はとうとう鳴咽した。③憲太は暗さにまぎれてしまいそうな彼のつむじを、しばらく睨んだ。

「……だつせ。めそめそしやがつて」

口から出た声は、憲太自身も驚くほどに低かった。

「おまえの未来つて、なんだよ」

その低さで、内にくすぶる怒りを憲太は自覚した。④学も異変を悟つたのか顔を上げた。

「どんな未来が望みなんだよ、言ってみろよ、おい」

そういえば、学の将来の夢を憲太は知らないのだった。憲太も教えていなかった。というか、真面目に考えたことがなかった。学校でそういった課題の作文を書かされたこともなかった。

学の未来については、村の大人たちが口々に好き勝手なことを語るのを耳にするだけだった。

「……医師」

学も低い声で一言答えた。

「は？ イシ？」

「医師。お医者さんだよ、久松先生みたいな」

子どものころから世話になっている、穏やかで優しいおじいさん先生の像が、憲太の頭の中で結ばれた。

また雷が連続して落ちた。学の喉が、ひゅつと鳴った。

なるほど、医者なら難しいだろう。難しくなければ困る。人の命を預かる仕事なのだから。でも。

⑤俺、今のおまえみたいなお医者さんなら、診てほしくない。ほんとマジ、絶対やだね」

雷が落ちたみたいに、学の体がびくつとなった。憲太はたたみかけた。「だつて今のおまえなら、手術失敗しても、器具が悪かったとか、とにかく上手いかなかったら周りのせいにしそうじゃん」

⑥なんだつて？」

(1-4)

学が眉をつり上げて席を立ち、上目遣いでねめつけてきたが、憲太は動じなかった。

「おまえ、さっき言ったこと忘れたのかよ？ 自分の成績が落ちたのを生田羽村のせいにしてた。こんな田舎だから駄目なんだってさ」

右手が勝手に動いて、向かい合う学の肩をつかんでいた。

「バツカじゃねえの？ 久松先生だつてこの村の出身だぞ。そりゃたしかにここは田舎だよ。でも、それだけの理由でおまえが駄目になるなら、それはおまえがその程度だったただだよ。全世界のお医者さんは一人残らず都会出身なのかよ？ 違うだろ？ 本当にすごいやつは、どこにいたってちゃんとやる」

「でも」

学が反論しかけた矢先、落雷があつた。手の中にある彼の肩が強張るのがわかつた。憲太はまた窓の外を見てしまった。空が明るくなることに、一面を覆う雷雲の形が、黒と群青と紫を混ぜたような色で浮かび上がる。

「でも……僕のことをすごいと言つたのは、僕じゃない。大人たちや、憲太だよ」

憲太の手首が、そつと学の右手で押しのけられた。冷たい手だった。

「大人にはなんと噂されてもよかったけど、憲太が言ってくれたのは嬉しかった。だから」

ずつと、誰よりすぐくあり続けなくてはいけないと思つた——学は打ちひしがれたみたいにうなだれた。

「あ……僕、憲太のせいにしたね」

⑦ 学はもう泣き声をたてなかつた。ただ、両手で顔を拭い続けた。雷が夜を走るたびに、唇を噛みしめ、目の下や頬に指や手の甲を押し当てる青白い顔が見えた。憲太はだんだんと不思議な気分になつた。学はクラスの中でははつきりと大人っぽい部類に入る。本校の生徒を含めてもそうだし、実際に目にしたわけではないけれど、札幌の進学塾のクラスでだつて、群を抜いて冷静で落ちつき払つた雰囲気だつたらう。けれども今、自分の前にいる学は、まるで子どもだった。雷に怯えて目を閉じ、耳をふさいでいた、遠い日のように。

そうか、嬉しかったのか。俺の言葉が。

もう何度目かわからない稲光と轟音が襲う。雷が光るたびに、幼かつたころの学が今の学と重なり、さつきまでの腹立ちはどこへやら、⑧ 憲太は自分でもわけがわからぬまま、笑つていた。

「俺さ、おまえのことすごいって言つたけどさ、別におまえが勉強すごいやつだから友達なんじゃない

(1-5)

いよ」

学の手が止まる。憲太は続けた。

「俺は学が神童だから好きなんじゃない。おまえがブサイクでも頭悪くても、おまえがおまえならそれでいいんだ」

「憲太……」

「テストの成績がすごいと思つたのは嘘じゃないよ。学がほめられるのもすごい嬉しい。でも俺、おまえの本当にすごいところ、別にあるのを知ってる」

「え？」

「春休みさ、おまえいなかっただろ？ だから俺、ビートの間引き作業、一人で手伝われたんだよな」

稲妻に言い言葉を切り、窓の外へと目をやつた憲太を、学が遠慮がちに急かした。

「……間引き作業がどうかしたの？」

「ああ、それな。あのさあ、間引き作業つてすげえ面倒くさくてつまんねえの。おまえ、知つてた？」

「まあ、地味で遅々として進まない作業つていうよね。うちの親は好きじゃないって言つてた」

「だろ？ おまえは？」

「僕は別に好きでも嫌いでもない」

「俺もそうだった。でも俺さ、今年初めて、うわ、この作業つまんねえつて気づいたんだよ。それまでは間引き作業を嫌いじゃないと思つてた。うんざりなんてしなかつたからさ。でも、本当は嫌いだったみたいなんだ」

学は頷いた。「それで？」

「でさ、なんで今まで毎年やってきて、嫌いだつて気づかなかつたのかなつて考えてみてさ、俺わかつたんだよ」

⑨ 憲太は学の胸元を人差し指で軽く押した。「去年まで、おまえと一緒にやつてたからだつて」

C 虚を突かれたような学の表情が、稲光に照らされる。その光の力を借りて、憲太は学の目を覗き込む。

「そうだよ、隣におまえが、学がいたから、『嫌い』や『つまんねえ』がごまかされていたんだ。おまえと一緒にやつたから、あの間引き作業もそれなりに楽しかつたんだ」

ただでさえ停電中のうえ、裸眼の学は視界がうまくとらえにくいのか、目をこらすようにじつと憲

(1-6)

太を見返してくる。

「僕も、嫌いだと思ったことはない……」

「来年おまえ、一人でやってみるよ。びつくりするほど時間経たねーから。あ、来年もおまえ札幌行くのか？」

学は特になにも答えなかった。構わなかった。憲太は心の内をそのまま言葉にした。

「とにかく俺、思ったんだ。友達ってすげえんだなあ、って」

嫌いだったりつまらない時間も、一緒にいさえすれば、乗り切れる。

楽しみすら、見出せるかもしれない。

そういう力を持つ、自分にとってたった一人の相手。

「おまえが本当にすごいのは、そういうところだよ」

学は静かに顔を伏せた。

(乾ルカ『願いながら、祈りながら』による)

※問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

(注) *1 嗚咽……声を出して泣くこと。

*2 ねめつけてきた……にらみつけてきた。

*3 ビート……砂糖の原料となる植物。サトウダイコン。

*4 裸眼……眼鏡やコンタクトレンズを使用していない状態の目。

(1-7)

問一 ~~~~~線部A「腑に落ちた」、B「打ちひしがれた」、C「虚を突かれた」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「腑に落ちた」

ア 昨日からの大雪のせいで、首都圏の交通網もやっぱり腑に落ちた。

イ あいつにはいつもひどい目に遭わされるから、たまにはたつぷり腑に落ちてもらおうか。

ウ どつぷり腑に落ちたうなぎは、とても食べられたものではない。

エ 国際関係は複雑だが、先生のわかりやすい説明ですっかり腑に落ちた。

オ 難攻不落を誇っていたこの城も、名軍師の采配によってあっさり腑に落ちた。

B「打ちひしがれた」

ア この前の話を何度打ちひしがれたとしても、何も言うことはないよ。

イ 久しぶりの雨で庭の木々もすっかり打ちひしがれた様子だ。

ウ 柱が丁寧に打ちひしがれた建物だからこそ、何百年も残ったのだよ。

エ 入口の騒ぎに皆が打ちひしがれたすきに早く脱出しよう。

オ 兄は彼女に手痛くふられてずっと打ちひしがれたままだ。

C「虚を突かれた」

ア 三回も虚を突かれたために幸せな気持ちになっちゃった。

イ この前は虚を突かれた形となったが、今度は大丈夫だ。

ウ どんなに頑丈な岩でも、名人に虚を突かれたらすぐに粉々だ。

エ わざと虚を突かれたことが昨日の試合の最大の勝因だといえるだろう。

オ 虚を突かれたせいですっかりひまになってしまった。

(1-8)

問二——線部①に「なぜ、涙ぐんでいるんだろう」とありますが、憲太は、学が涙を流したのはなぜだと理解しましたか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 勉強するための環境が整っていない田舎に住んでいるせいで、自分がどんなに努力をしても都会の子に負けてしまう現実がとても悔しかったからだと、憲太は理解した。
- イ 自分勝手な夢を描いて田舎へ移住した親のせいで、自分の夢を実現しにくくなっていることが腹立たしかったからだと、憲太は理解した。
- ウ 田舎に住んでいれば簡単に手に入るはずの環境がないせいで、自分が目標とする理想的な勉強ができないことが歯がゆかったからだと、憲太は理解した。
- エ 周囲が自分のことを理解しようとせず「神童」扱いするせいで、憲太までもが自分の悩みに向き合ってくれないことが情けなかったからだと、憲太は理解した。
- オ 田舎に住んでいることから生じるさまざまな不利益が、動かしがたい現実として自分の未来を飲み込もうとしているのを感じ、無力感に押しつぶされそうになったからだと、憲太は理解した。

問三——線部②に「でもおまえ、今でも十分すごいじゃん」とありますが、このときの憲太の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア めったに見たことがない学の涙に戸惑いながらも、ようやく本音をぶつけてくれたことを嬉しく思い、応援したいという気持ち。
- イ 勉強のことなど自分には皆目わからないけれど、泣いている学をそのままにすることはできず、立ち直らせるために一肌脱がなければという気持ち。
- ウ 直接的ではないが、自分の祖父が原因で学を苦しめているので、とりあえず何か話して学の気を紛らわせようという気持ち。
- エ 勉強のことで何をそこまで思い詰めているのかわからないけれども、泣くほどのことではないだろうからまずは落ち着かせようという気持ち。
- オ 頭脳明晰で強い意志を持つ学が落ち込む必要などないのだという客観的な事実を、できるだけ冷静に伝えようという気持ち。

(1-9)

問四——線部③に「憲太は暗さにまぎれてしまいそうな彼のつむじを、しばらく睨んだ」とありますが、このときの憲太の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 学が覚悟を決めていることはわかったが、村の人の気持ちを考慮しない学の考え方には共感できず、さらにはそんな学の姿に対して、軽蔑にも似た怒りを抱いている。
- イ 学が勉強にかける意気込みはわかったが、村の人たちをないがしろにする学の考え方には共感できず、さらにはそんな学の姿に対して、憎悪にも似た怒りを抱いている。
- ウ 学が苦しんでいることはよくわかったが、村の価値観とは違う学の考え方には共感できず、さらにはそんな学の姿に対して、もどかしさにも似た怒りを感じている。
- エ 学が努力を続けてきたことはわかったが、自分の村を否定する学の考え方には共感できず、さらにはそんな学の姿に対して、不信任にも似た怒りを感じている。
- オ 学がなぜ泣いているかはわかったが、村のせいにする学の考えには共感できず、さらにはそんな学の姿に対して、失望にも似た怒りを感じている。

問五——線部④に「学も異変を悟ったのか顔を上げた」とありますが、このとき学はなぜ顔を上げたのだと考えられますか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 今まで憲太はいつでも味方でいてくれると思っていたが、手のひらを返したように自分のことを突き放そうとしていることに気づき、どのように反応すればよいかと焦ったから。
- イ とりあえず励ますことしかできない憲太を自分が問いただしてはいたはずなのに、いつのまにか憲太から問いつめられる状況に変わっていることに驚いたから。
- ウ 憲太がいつのまにか心の中に怒りをくすぶらせていることに気づき、まずいことになったと思いつつも、どう対応すればよいのかわからずに戸惑ったから。
- エ これまで自分を評価してくれていた憲太が、うってかわって自分のことを否定し始めたことに気づき、態度の変わりように無性に腹が立ったから。
- オ 憲太の言葉も受け入れられないほど気持ちが高ぶっていたが、今までと違う口調に違和感を覚え、憲太の様子が気になったから。

(1-10)

問六 —— 線部⑤に「俺、今のおまえみたいなお医者さんなら、診てほしくない。ほんとマジ、絶対やだね」とありますが、この言葉に込められた憲太の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学の夢が予想外のものだったことに驚きつつも、人の命を預かる仕事の責任の重大さを自覚させたいという気持ち。

イ 学の考えに対して反発を感じると同時に、そんな考えに陥（おちい）つてしまっている学に自分の考えの不十分さをわからせたいという気持ち。

ウ 日頃（ひごろ）から尊敬している学だからこそ、志の低い医師ではなく、立派な医師を目指してほしいという祈（いの）るような気持ち。

エ 自分にはとうてい真似（まね）のできないような立派な夢を持っている学がうらやましく、ひとこと言わずにはいられない気持ち。

オ 学の将来の夢を否定するような挑発（ちょうはつ）的なことばを使うことで、いつまでもめそめそしている学を奮（ふん）立たせたいという気持ち。

(1-11)

問七 —— 線部⑥「なんだって？」から、—— 線部⑦「学はもう泣き声をたてなかった」までの学的心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の将来に田舎暮らしが不利益をもたらすという考えを根底から否定されたと思って強い憤（いきどお）りを感じたが、憲太の理屈に筋が通っていたことと雷の音に驚いたこととでとっさには反論ができず、完全には納得できないまま憲太のペースに巻き込まれつつある。

イ 自分の成績の伸び悩みを他人のせいになっているというのは言いがかりだと反射的に抗議（こうぎ）をしたが、落雷に浮かんだ空の美しさに心が奪（うば）われた瞬間（しゅんかん）にこれまでのわだかまりが消えて、自分の言動を反省しつつある。

ウ 自分の将来への不安から、憲太の言葉も耳に入らないほど興奮していたが、憲太が話した久松先生の頑張（がんば）りを思えば、自分がささいなことで悩んでいたと恥（は）ずかしく思い、憲太の励ましを受け入れられる素直（すなお）さを取り戻しつつある。

エ 自分の成績が落ちたのを村のせいにしたことを憲太に見破（きや）られないように虚勢（きよせい）を張ってはみたものの憲太の説明に圧倒（あつぷ）され、雷が鳴り止まないことへの恐怖（きょうふ）もあり、ただ弱々しく反論することしかできなくなりつつある。

オ 自分の将来の夢に文句をつけるような憲太の言いように腹を立てたが、落雷によって反論のタイミングがずれ、今までの憲太の自分への言動を思い起こしながら、自分を振り返ることができなくなるくらいに気持ちが落ち着きつつある。

(1-12)

さつき、みなさんは、ロボットに知能はあるけど、心はないと言いましたね。

では、生物には、どうでしょうか？

犬に心があると思う人は、きつと、多いと思います。

でも、⁴デカルトなんかは、犬は機械だと考えているので、心なんかない、ものなわけです（これを「動物機械論」と言っています）。それで、人間だけ心がある。デカルトの言う「心」は、特殊^{とくしゅ}とか、難しいのですが、とにかく、デカルトや西洋哲学^{ていようがく}では、人間だけが特別で、心がある、ということを行っています（あの人達^{たち}、ちよつと冷たいので（笑））。

一方、日本というか東洋というか、西洋じゃないほうは、今も言ったように、「⁵狗子^{くし}仏性^{ぶつじやう}」⁶と云って犬にも心があるとしている。

だから、人工知能とかロボット工学が日本で非常に盛んで、先端^{せんたん}を行っていることの一番大きな理由は、そんな伝統の上に、「³鉄腕アトム^{てつわんあトム}」の⁶手塚治虫^{てづかおさむ}がいたつていうことではないかと思ひます。ロボットに心があると、日本人の若い研究者達が素直^{すなお}に思えるのは、鉄腕アトムなんかのロボットアニメの影響^{えいぎやう}が、多分きわめて大きいですね。

鉄腕アトムの歌、知っていますか？ 一番では、アトムは「心やさしい科学の子」ですよ？ 詩人の谷川俊太郎^{がわしゆんたろう}さんが作った歌ですが、科学の子で、心やさしい。心やさしいんだから、もう心あるよね？ それは、人工知能問題だけじゃなくて、二十世紀後半に、私達が「科学つていうものこそ、人類を幸せにする最高のものだ」と思っていた時代の、象徴^{しやうちゆう}ですよ。鉄腕アトムつていうロボットは、知能もあれば心もある、もしかしたら、人間より心がやさしいかもしれない、というふうなイメージが、日本にはある、と思います。

でも、西洋は、やっぱりキリスト教の伝統が非常に強いので、「神が創り賜^{たま}うた人間と、人間以外」という世界観を持っています。神が上にいて、その神に造られた被造物^{ひぞうぶつ}としての人間、そして自然、という段階があつて、人間は神の似姿、^{Imago Dei}（イマゴ デイ）です。「Dei（デイ）」というのは、「Deus（デウス＝神）」です。神のイメージ「Imago Dei」である人間、という世界観がどうしてもあるので、キリスト教的世界観の中で、人間は特別です。特別だから、自然に対しては支配者だつていう、こういう構造があるわけです。そして、⁴そういうヨーロッパ的世界観の中では、ロボットの中に心を見いだしにくいわけですね。

さて、ここでロボットに心があるかないかを考えるヒントとして、文芸の問題を例にとつてみましょう。

(1-15)

「わが恋は 空の果てなる 白百合か」

突然^{とつぜん}、日本文学の授業みたいですが、俳句です。これ、どういう句に読めますか？ いい句だと思う？ いい句でないと思う？

読者投稿^{とくしやうとうこう}の俳句コーナーに出されたら、「空の青と白百合の白が効いてますね」とか、⁵「届かない人への切なさが伝わってきます」なんて講評されるかもしれません。

では、こつちの俳句は、どうでしょう。

「古池や 蛙飛び込む 水の音」

ご存知^{ごぞんじ}の名句です。「古い池に蛙^{かえる}が飛び込んで、その水の音が聞こえるほどの静けさがいい」、「『ポチャン』つていうその音が、静けさを表わしています」みたいな、そんな句です。

では、この二つの句は誰^{だれ}が詠んだものでしょう。

「古池」は、ご存知の通り、松尾芭蕉^{まつお ばしやう}ですね。

さて、「わが恋は」は誰が詠んだものかと言うと、実は、コンピュータが詠んだ歌なのです。

コンピュータが詠んだつて言つても、すごい簡単なプログラムで、五七五の、頭の五のところに、七のところに、最後の五のところに、ありそうな言葉をパーツと入れておいて、それをランダムに発生させると、こういう句がいくらでもできるわけ。スロットマシンのそれぞれの枠^{わく}が、言葉になった感じと言えはわかるでしょうか？

これは、騙^{だま}されそうですよね。読者コーナーに投稿して、うっかり入選してしまつて、「作者の心情が伝わってきます」なんて言われたときは、もう「実はコンピュータの俳句です」とは言えなくなりませんね。

でも、この俳句の「作者の心情」と言つたときの「作者」というのは、誰かつていうことを考えてみると、どうでしょう。

一つはコンピュータ。するとこれ、コンピュータの心情がよく出ている？ マックのコンピュータが、となりのウィンドウズに恋をして、「最近^{こさい}は互換^{ごかん}はできるようになったけど、なかなか心を通じ合えるところまではいかないなあ」とか。それで、相手のウィンドウズは、空の果てなる白百合みたいに手の

(1-16)

届かないところにあります、っていう、マツクの心情を詠んだ歌？…… 違いますよね。

単語をランダムに並べて作ったのだから、感情は別に入っていない、と思うのが普通だと思います。

では、その感情はどこに入っていないのか？ もちろんコンピュータには入っていない。じゃあどこに入ってるんだろう？ だってあなたも、「わが恋は 空の果てなる 白百合か」って俳句を見たときに、「成就しない恋だな」とか思って、ちよつと寂しい気持ちになりませんでした？ それはコンピュータが詠んだんじゃないの？

寂しいと感じたのは、私達。受け手が感情移入できれば、感情がこもっていると思うのかもしれない。確かに松尾芭蕉の歌だって、日本人が、「古池や 蛙飛び込む 水の音」で、みんなそういう静かなシーンを想像できるから、いい句って言われているだけであって、外国に持っていったら、何がいいのかわからないって言われるのかもしれない。

そうすると、この句の感情の部分は、コンピュータが作ったというよりは、読者側の感情移入なわけです。こうして、その作者の心情って何かってことを考えると、それは実は、読み手側の心情の投げ入れだ、ということになります。

コンピュータの心を考えるときのすべての本質は、実はここに現われています。

私はこの二つの立場を、「〈作者〉の実体論的把握」と、⑥「〈作者〉の関係論的把握」というふうに、呼んでいます。実体としての「ある」と、関係としての「ある」。この二つの立場を、ロボットの心とは何かって考えるときに、考えなきゃいけない。

そして、私が考えるには、ロボットの心っていうのは、実は「関係論的把握」で、こっちが投げ入れている心なのだと。ロボットの心と思われているのは、こっちの心をロボットの中に読み込んでいるんだと。それこそがロボットの心の本質であって、ロボットそのものに心はない、というふうに私は思っています。

でも、こうなると、⑦「ここから非常に哲学的な問題が出てきます。そしたら「芭蕉の句だって同じことじゃない」と。」

(黒崎政男『今を生きるための「哲学的思考」』による)

※問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

(注) *1 米長さん……米長邦雄。タイトル獲得数歴代五位の棋士。日本将棋連盟会長も務めた。

*2 羽生さん……羽生善治。タイトル獲得数歴代一位の棋士。

*3 アイ・ビー・エム……IBM。アメリカのコンピュータ会社。

*4 デカルト……フランスの哲学者。

*5 狗子……犬のこと。

*6 手塚治虫……漫画家。「鉄腕アトム」は代表作。

問一——線部①に「そういう時代」とありますが、どのような時代のことですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先日の将棋の対局の結果から推測されるように、人間が自ら開発したコンピュータに完敗し、逆に自分たちの限界が明らかにされる時代。

イ 先日の将棋の対局の結果から想像されるように、人間がどれだけ集中力を発揮したとしてもコンピュータの知能を制御できなくなってしまう時代。

ウ 先日の将棋の対局の結果から予測されるように、人間の思考力といえども進歩したコンピュータの知能にかなわなくなってしまう時代。

エ 先日の将棋の対局の結果から危惧されるように、人間が優位性にあらをかいいている間に、下に見ていたコンピュータに追いぬかれてしまう時代。

オ 先日の将棋の対局の結果から想定されるように、人間を超える知能を持つコンピュータが実現し、人間の尊厳が脅かされる時代。

問二——線部②に「もうちょっと牧歌的でした」とありますが、それはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア チェスの対局で、最先端の技術で作られたコンピュータには負けたが、一度きりの敗北にすぎず、まだまだ人間の優位性を信じられたから。

イ チェスの対局で、高度な計算能力を備えたコンピュータに負けたとしても、あくまで機械に負けたのであって、人との心の読み合いで負けたのとは違うと思えたから。

ウ チェスの対局で、科学の結晶であるコンピュータが人間に勝利したことで、心を持つロボットの実現に向け、研究が一步進んだと思えたから。

エ チェスの対局で、論理的思考力の象徴としてのコンピュータに負けてしまったが、勝ち負けを超越した人間の何気ない能力が示されたから。

オ チェスの対局で、圧倒的な処理速度を誇るコンピュータに負けてしまったものの、人間の思考の効率の良さを感じることができたから。

(1-19)

問三——線部③に「鉄腕アトム」とありますが、ここで筆者が「鉄腕アトム」の話を持ち出したのは、どういうことを説明するためですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間を幸せにする科学技術の象徴である鉄腕アトムという存在が可能であったのは、優れた知能とやさしい心を持ったロボットのイメージが、日本の人工知能やロボット工学を世界の最先端とも言えるほど進化させたからだということ。

イ 科学というものこそ人類を幸せにする最高のものだ信じられる二十世紀後半という時代が訪れ、日本の人工知能やロボット工学が世界最先端の地位を築くことができたのは、詩人の谷川俊太郎さんの作った鉄腕アトムの歌があったからだということ。

ウ 日本において人工知能やロボット工学が非常に盛んであるのは、動物にも心があるという伝統的な考え方があったことに加えて、鉄腕アトムによって科学技術の可能性を信じる気持ちとロボットには知能や心があるというイメージが広がったからだということ。

エ 若い研究者たちが知能や心を持つロボットを作ることができると素直に信じ込み、人類最高の幸せという夢をかなえる先端技術が実現できたのは、伝統的に犬にも心があると考える日本に、鉄腕アトムを描いた手塚治虫が登場したからだということ。

オ ロボットアニメがたくさん作られ、それを見た子どもたちの多くが人工知能やロボット工学の可能性を信じて科学者を志すようになったのは、心やさしい科学の子として歌い継がれた鉄腕アトムの存在が日本にはあったからだということ。

(1-20)

才俳句とは、詠み手の気持ちが込められた言葉の中に、聞き手が自分で共感できる気持ちだけを
読み取るものである、という考え方。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

